残り時間

澤村

九回裏同点、ツーアウト満塁で一打出ればサヨナラの大ピンチの場面。俺は一年生でありながらこの最悪の状況のマウンドに立たされていた。しかし俺はこの時最悪の状況とは考えてはいなかった。ここで俺が抑えることができればまだ甲子園への可能性がある。決勝まで来たんだ、絶対に抑えて三木さんを、先輩たちを甲子園に連れて行く。そんな気持ちで俺はマウンドに上がった。

だが気合とは逆に、結果は最悪のものだった。相手の頭部へのサヨナラデッドボール。俺はキャッチャーの外角へのボール球の要求に首を振ってインコースを強気に攻めた。しかしその俺の不用意な一球で全てを壊してしまった。

「ゲームセット！」

審判の試合の終わりを告げる無常の声がグランドに響き渡る。俺はしばらくその場に泣き崩れ、しばらく立つことができなかった。

「…またあの夢か」

あの日から一年以上も経つのに定期的にこの悪夢を見てしまう。もう野球部を辞めて一年以上も経つというのに。

「勘弁してくれよ…今日から新学期だってのに目覚めが悪い」

布団から出て制服に着替えていると下から母さんの声が聞こえてきた。

「峻～起きてる？和海ちゃんもう来てるわよー」

和海というのは家が隣同士の幼なじみの女だ。小学校のときは少年野球、中学ではソフトボール、高校では野球部のマネージャーと女子には珍しい野球漬けの人生を送ってきている生粋の野球バカの女だ。

「あぁ起きてるよ、着替えたらすぐ行くよ」

俺は適当に返事をして学校へ行く準備を着々と済ましていく。

階段を下りると母さんが俺におにぎりを一つ渡して、玄関に行くように指示してきた。どうやら和海は外で待ってくれているらしい。昔みたいにいきなり家に上がりこんでこないだけマシだ。俺は特にすることも無かったのでかばんを持って和海が待つ外へ行った。

「ん、おせーぞ峻！女の子を待たせるものではないぞ」

和海は片手に野球ボールを持ち、仁王立ちで俺を待ち構えていた。普通に考えればおかしな光景なんだがもう何年も見てきた光景なのですっかり慣れてしまった。

「あーおはよう。てかお前が早すぎるんだよ」

「いいじゃんか、私のおかげで今まで遅刻ゼロじゃん。感謝してほしいくらいだよ。ほら学校行くぞ！」

…和海の言うこともあながち間違いではない。和海が早起きのおかげで小中高と遅刻はしたことがない。そして和海は今まで一度も風邪で休んだことがない。バカはなんとやらとはよく言った

ものだ。
「感謝してますよ。全く、始業式だからってはりきって早起きとか小学生かよ」
「ところで峻、まだ野球部には戻らないのか？一緒に甲子園目指そうぜ！」
はぁ…こいつはほんとに人の言うことを聞かないな。
「またその話かよ…」
和海がこんな話をしてきたのは今日が初めてではない、俺が野球部を辞めてたらほぼ毎日俺に野球部に戻れだのキャッチボールしようなどと話しかけてくるのだ。正直かったるいからいつも適当に流していたが今日はいつもと様子が違うみたいだ。
「…なぁ、いつまでそうやって野球から逃げてるんだよ」
いつもみたいな元気ではりのある和海の声はそこにはなく、珍しく湿った声で俺に問いかけてきた。
「私知ってるんだぞ。峻がただ野球がいやになって辞めたんじゃないってこと。あの日、デッドボールを当ててから峻、ちゃんと打者相手に投げられなくなったんだろ？私この前三木先輩に会って、聞いちゃったんだ。峻のその…イップスのこと」
まさか和海に知られることになるとは。確かに俺は野球を嫌いなったわけじゃない。野球は見るし昔と変わらず野球は大好きだ。
「そうか三木さんが…」
和海の言う通り俺はあの日からイップス（精神的な原因などによりスポーツの動作に支障をきたし、自分の思い通りのプレーができなくなる運動障害のことである。）に陥った。分かったのは試合で負けてから数日後のことだ。野球部に顔を出さないことを心配してくれた三木さんに誘われ、一緒にキャッチボールをしたときのことだ。ちなみに三木さんというのは俺の中学時代からの先輩で、俺の尊敬する速球派のピッチャーだ。俺がピッチャーをやっているのは三木さんの影響が大きい。
そのときだった。三木さんとのキャッチボールの一投目、俺は真っ直ぐ投げることができなかった。野球をやっていない素人でも真っ直ぐ投げることぐらいはできる。それができなかった。そこからというもの一球も三木さんのミットに向かって投げることができなかった。その後俺は野球部を去った。野球部の何人かは俺のイップスのことを知っているが、和美は知らないはずだ。和海には知られたくなかった。だから野球部のみんなには黙ってもらっていた。こんな情けない理由であいつとの約束を破ることになるなんて…。
「おい、聞いてるのか？」
悲しみに浸っていた俺に和海は俺の手を掴み強引に和海の正面に立たせた。
「なーに心配すんな！私が治してやるよ。放課後家の近くの公園で待ち合わせだ。キャッチボールしようぜ！待ってるからな。」
「おい、勝手に決めるな。」
俺の言葉は届かなかったのか、和海は学校に用があるとか行って鼻歌を歌いながら先に学校にいってしまった。あの自由さは少し羨ましいと思った。

学校にいる間俺はずっと考えていた。実は俺は野球部を辞めたが、イップスが直ればすぐに練

習に復帰するはずだったのだ。自分で言うのもなんだが俺は中学ではバリバリのエースをやっていて、この高校でも入部時から三木二世などと周囲から言われて期待されていた。だから監督も一度部を離れて治ったらすぐ戻って来いと言われていた。

それからというもの仲のよかった部員達、中学からの付き合いの友達を誘ってなんとか治そうとしたが、上手くいかなかった。最初は協力的だった友人達も一向に治らない俺に嫌気が差していた。そして俺もこれ以上付き合わせて人間関係が壊れるのも嫌だと感じて誘うのを辞めた。それからは一人でバッティングセンターのピッチングコーナーで投げたり、特に仲のよい、親友と呼べる何人かとキャッチボールをして自分なりに頑張ってきた。おかげで軽いキャッチボールならだいぶまともに投げられるようになった。でも座って、キャッチャーのような姿勢の相手に投げるとなると全然だめだ。あのデッドボールの悪夢、俺は忘れたつもりだったが体は、腕は正直だった。震えが止まらない、すっぽ抜けたり引っかかったりと散々なものだ。顔には出さないがみんなあきれていただろう。変に気にしてしまって最近は全然していない。

いつものようにだらだらと過ごしていたら約束の放課後になった。俺はクラスメイト数人と駄弁った後、家路に着いた。家に着くと母さんが俺を迎えてくれた。

「おかえり峻、今日はカレーよ」

「ただいま、カレーかよ…」

匂いで分かってはいたが、やはりカレーか。どうでもいい情報だが俺はカレーが大嫌いだ。帰宅早々テンションを下げられてしまった。

絶望の淵に立たされた俺は、母さんとの会話もほどほどに自分の部屋へと帰還した。そしてジャージに着替え、グローブとボールを一つを用意して、和海が待つ公園に向かった。

公園に着くと、和海は近所の子供（小学生ぐらい）とキャッチボールしていた。俺に気づくとキャッチボールを辞め、こっちに手を振りながら走ってきた。

「遅いぞ峻！私を待たせるとはいい度胸だな！」

「…来たんだからいいだろ？てか、今気づいたけどお前部活はどうしたんだよ」

「部活？監督に峻を復活させるために休みますっていったらすんなり休ませてくれたぞ。」

全く適当な監督だこと。それ以上は追求せずに黙っていると和海がいきなりボールを投げてきた。

「つぶね！おいこっちはグローブまだはめてないんだぞ！」

「大丈夫大丈夫気にすんな。さぁやろうぜ」

ほんとうに自由なやつだ。しかしそんないろいろと気にしない和海だから気軽にできる。それはありがたいことだ。

俺はグローブをはめて、ボールを和海に返した。

「おっ、なんだ投げれるじゃん」

和海はご機嫌だ。そういえば和海とキャッチボールだなんていつ以来だろう…少し考えたが思い出せない。ま、そんなことどうでもいいかと思いつつキャッチボールを続ける。

「これなら私が手を貸す必要もないんじゃないか？思ったより投げれるじゃないか♪」

キャッチボール中でも和海はよくしゃべる…一球一球の間に絶えず声をかけてくる。その元気を

野球以外にも活かしてほしいものだ。お前、この前のテスト赤点三つとってたろ…。
そんな感じで数分間キャッチボールを続けた後、俺は和海にキャッチャーみたいに座るように指示した。
「おっ、投球練習か？なんだノリノリじゃん。」
和海…それは違う。これはお前に本当の俺を見せるためだ。俺はイップスを克服なんてしちゃいない。案の定震えがとまらない。それでも分からせなくちゃいけない。変な期待を持たせたくない…。俺は投球フォームから和海のミットに向かって投げた。
しかしそのボールはミットに収まるどころか和海の遥か頭上を越えていった。
「峻…まぁ気にするな！時間はたっぷりある、どんどんこい！」
そう言って和海はボールを返してくる。違うんだよ…これが今の俺なんだ。
もう一球投げる。次は右に大きく逸れた。
「うん、さっきよりはいいボールだぞ峻！」
投げる。また右に逸れた。
「峻！ゆっくりでいいぞ。落ち着いて投げろ！」
次はボールが指に引っかかりショートバウンドになった。
「うんいいぞ、だんだん正面に来てるぞ！」
その次のボールはすっぽ抜けてまた和海が取れないようなボールになった。その次も、また次も、そのまた次も次も次も…。俺が糞ボールを投げるたびに和海は俺に励ましの声をかけてくる…やめてくれ、俺が惨めなだけだ…これ以上はやっぱり無理なんだ。一番古い付き合いである和海相手でもこのざまだ。俺が投げるのをためらっていると和海が俺の元へと寄ってきた。
「峻の状態は分かった。だが遠慮せずにどんどんこい！私と峻の仲じゃないか」
和海は口調は軽いが本気で俺を心配してくれている。だが今の俺にはそれはただ俺を哀れむような言葉にしか聞こえなかった。
「うるさい！今日の俺を見てわかったろ！もう俺は投げれない…いくらやっても治らないんだよ！」
気がつくと俺は何も悪くない和海に対して怒気ぅぃ飛ばしていた。罪悪感はあったが俺は抑えれなかった。
「俺のことはもうほっといてくれ。ごめんな…俺はもうだめなんだ…」
ボールを返して俺は和海に背を向けた。
「峻…どうしたんだよ、あきらめるなんてお前らしくないぞ！私はお前を何十年も見てきた！お前はそんな男じゃなかったはずだ！」
後ろで和海が何か言っている…その声を無視して俺は歩き始める。今日はいろいろと疲れた。早く家に帰ろう。
「峻！明日もやるからな！ここで待ってるぞ！」
その声を俺は無視して家に帰った。
家に帰ると俺はシャワーを浴びて母さんが用意してくれた晩ご飯を食べると自室にこもり、疲れもあってか早々に寝てしまった。

次の日の朝も和海は迎えに来てくれたが、昨日の今日で妙に気まずかったので適当に利用をつけて先に行ってもらった。
学校では和海に会うこともなく時間が過ぎていった。
特に何事もなく今日も学校は終わった。放課後外に出てみると雨が降っていた。降水確率は低かったが傘を持ってきてよかった。俺は雨が弱いうちにさっさと家へ帰った。
家に着くと同時に雨足が強くなってきた。俺はほっと一息して部屋に戻った。部屋に戻ると昨日使ったグローブが目に入った。
「この雨じゃ…無理だよな。ま、元々行く気はなかったが」
外はさっきよりも雨が激しくなっていた。何か嫌な予感がした。
しばらく部屋でゴロゴロしていたら外で雷が鳴った。そういえば和海はあの程で雷が苦手だったな。
「まさか…な」
雨、雷が強くなるたびに嫌な予感が強まっていった。心のもやもやが晴れない、俺は思いすごいであってくれと思いながら傘を差して家を飛び出した。

しかし嫌な予感ってのはよくあたるものだ。公園には和海が一人雨に打たれながら立っていた。
「おい和海！お前…何考えてるんだよ！」
俺は傘を投げ捨てて和海の下へと急いだ。
「峻…遅いぞ…」
そこには力なく笑う和海の姿があった。
「バカが…なんで、お前は…」
「約束したじゃん、明日もやるって、待ってるって」
「約束ってお前…そんなもんこの雨じゃ」
「じゃあさ…あの約束も忘れたのかよ、私を甲子園へ連れて行ってくれるって…」
こいつ、そんな昔の…和海は忘れてなかったのか。
「忘れちゃいねえよ。そのために俺は今まで野球をやってきたんだ。今はこんなだけどな」
俺がそう言うと和海はボールを投げてきた。
「峻から野球取ったら何が残るんだよ…私は野球を楽しそうにするお前の姿を見るのが大好きだった。今の峻、全然楽しそうじゃない、投げれなくて、苦しそうに野球する峻なんて見てられないよ…甲子園なんていいから峻のマウンドから投げる姿、私はもう一度みたい」
「和海…」
和海がそんな風に俺を見ていてくれたなんて…嬉しい気持ちだが、そうだとすると今の俺の姿は和海には愚かに写っていただろう。今の和海はひどい顔をしている。いつもの元気いっぱいの笑顔はそこにはない。それを奪ったのは紛れもないこの俺だ。俺にはそれを取り戻す義務がある。
「明日、晴れたらここにもう一度来てくれ。これは俺からのお願いだ」
俺はボールを和海に投げ返してそう言った。俺はなんて単純なやつなんだろう。和海に言われただけでこんなに野球に対する熱意が復活するとは…。

次の日は打って変わって快晴だった。和海はまるで昨日のことが嘘のようなテンションで朝迎えに来てくれた。そして放課後も公園に来て俺とキャッチボールをしてくれた。次の日からは流石に部活を休めなかったらしいが、その代わりに朝、学校に行く前にキャッチボールをするようになった。俺のイップスの症状はまだまだ完治というレベルではないが、和海相手だとまだまともに投げられる。何より楽しい。今の俺をちゃんと見てくれる、相手にしてくれる存在がいるからだ。それに果たすはずの約束がある。

そして今日もいつものようにキャッチボールをはじめる。

「…俺は幸せ者かも知れないな」

不意にそんな言葉が出てしまった。

「今更かよ、バーカ」

そこにはいつものように無邪気に微笑む和海がいる。まだイップスの恐さはあるが、今はそれだけで十分だ。